

大原社会問題研究所五十年史

I 創立前史

米騒動と大原社会問題研究所

この年(一九一八年)七月、富山県の一漁村に端を発した米騒動は、またたくまに北陸諸県にひろがり、やがて岡山、兵庫、大阪、京都に波及し東京におよび、全国各地の米商人、高利貸、大地主、富豪は焼打ちにあい、政府は武装警官、軍隊を出動してようやく暴動を鎮圧することができた。米騒動の直接の原因は、前年度の米の減収と軍隊のシベリヤ出兵にともなう政府の米買入れ、投機の盛行等による米価暴騰にあるが、第一次世界大戦中の好景気にともなう物価高によって国民生活が脅やかされたことも大きな原因である。根本的には大戦を通じて急激に発展した日本資本主義の社会的矛盾が——一方における富の蓄積と、その対極における貧困の蓄積が——米価の暴騰をきっかけとして爆発したものにほかならない。

米騒動の動機や経過の如何はともかく、それがわが国の支配階級を威嚇し、また一般社会に巨大な波紋を投じたことは疑いない。明治末の幸徳事件いらい、官憲の弾圧によって潜勢状態におかれていた労働運動、農民運動はじめ、各種の社会運動は急激に勃興し、デモクラシーや社会主義的思想も勢を増した。ロシア革命の遠い響も伝わって来た。

九月には米騒動の責を問われて寺内内閣は瓦解し、代って原内閣が成立した。政府による種々の経済政策が講ぜられ、民間にあっても三井、三菱など財閥は費用を投じて各種の慈善事業、救済事業を行うにいたった。「労資協調」をはかるため、協調会が設立されたのもこの時期である。

富裕な産業資本家であり、貧民救済や保育事業に私財を投じていたクリスチャンの大原孫三郎氏がこの米騒動によって深く心を動かされたことはいうまでもない。愛染園の開園式における前述の言明によってもわかるように、大原氏はこの時すでに、たんに社会の病弊たる貧民、孤児、売笑婦などを救済するだけでは不十分で、すすんでこれらの病弊を生みだす根源をさぐり、これを救治する方策を研究せねばならぬとの認識に達していたと思われる。そして小河滋次郎、後にはこの推薦により高田慎吾氏をむかえるに及び、貧民や失業者、売笑婦や孤児など、これら近代社会の病気をなおすには、個々の応急的な救済事業ではなく、組織的な社会事業を遂行せねばならないと考えるにいたったと思われる。米騒動の勃発は、そういう大原氏の認識をますます強めたことは想像に難くない。

同年秋に大原氏は徳富蘇峰、谷本富両氏に研究機関設立について相談し、ついで徳富氏の推薦する京大教授河田嗣郎氏と、谷本氏の推す京大講師米田庄太郎氏に会い、さらに当時社会問題研究者として盛名をはせていた京大教授河上肇博士を訪うた。河上氏は大原氏の相談役として、また経営の適任者として東大教授高野岩三郎博士を推薦し、これに紹介状をあたえた。

こうして同年一一月末日、大原氏の秘書柿原政一郎氏は高野博士を訪うて大原氏の意をつたえ、その後高野氏と大原、河田両氏間に書簡の往復があり、話は急速にすすんだ。

翌一九一九(大正八)年一月一二日、大原氏は柿原秘書とともに、東京に高野氏を訪ね、社会問題研究所設立について尽力を乞うた。その時大原氏の持参した河上博士の紹介状には、つぎのよ

うに書かれている。

今回大阪に社会問題研究所を創設致候件に付高見拝承の爲御紹介致候 豫てより岡山
孤見院の最も有力なる後援者に有之 御腹藏なく御高見御示被下度奉願上候 敬具 高野
博士侍史
京都市 河上肇

高野氏は大原氏と意見を交えた結果その申し出でを了承し、二月初旬大阪で関係者と会合しようと約束した。もっとも高野氏はすでに先日来の書簡往復によって社会問題研究所創設の企てを知り、その構想を練りつつあったことは疑いない。大原・高野初会見の二日前、すなわち一月一〇日に、久留間鮫造氏が友人林桂二郎氏の親父林源十郎氏の紹介で大原氏に会ったのち同氏のすすめで高野氏と面会し、研究所創立の暁には入所したいと話したのに対し、高野氏は「考慮しよう」と答えている。

法政大学大原社会問題研究所五十年史

発行 1970年11月

編・発行法政大学大原社会問題研究所

[前のページ](#) ← [法政大学大原社会問題研究所五十年史【目次】](#) → [次のページ](#)

[研究活動・刊行物](#) [OISR.ORG全文検索](#)

[法政大学大原社会問題研究所\(http://oisr.org\)](http://oisr.org)
